随筆

イラクを訪ねて (4)

塙　　輝　雄*

5．地方都市と遺跡

粘土板に刻まれた楔形文字によって5,000年の昔まで歴史を溯ることが出来るメソポタミアの地を踏んで，遺跡や地方都市について語らなれけば大変な片手落となろう．とは云っても，詰まった日程の間を縫っての見物であったから，場所も時間も限られて居り，歴史に精通しているとは云えないので，書けば不完全さと間違いは避け難いであろう．こう考えて紹介の筆を取り渋って来たのである．しかし，最近刊行された二，三のガイドブックは筆者のためらいを除いてくれた．これらの本にも，知り度いことの多くが欠落して居り，誤りも含まれていることに気付いたからである．どうしてそうなるのかと考えて見ると，現地では参考とすべきキメ細かな案内書や地図は殆んど入手不可能で，ガイドも知らないことでも適当に喋べってしまう傾向をもっているからと思われる．とも角，この方面を紹介するには間違いを恐れない精神と想像力に加えて科学の研究にも似た慎重さが要求されるのである．読者もまた書かれたことを100%信用してはならないのである．勿論この小文も例外ではない．まず北の方から始めよう．

5．1．モースルとニネヴェと山岳

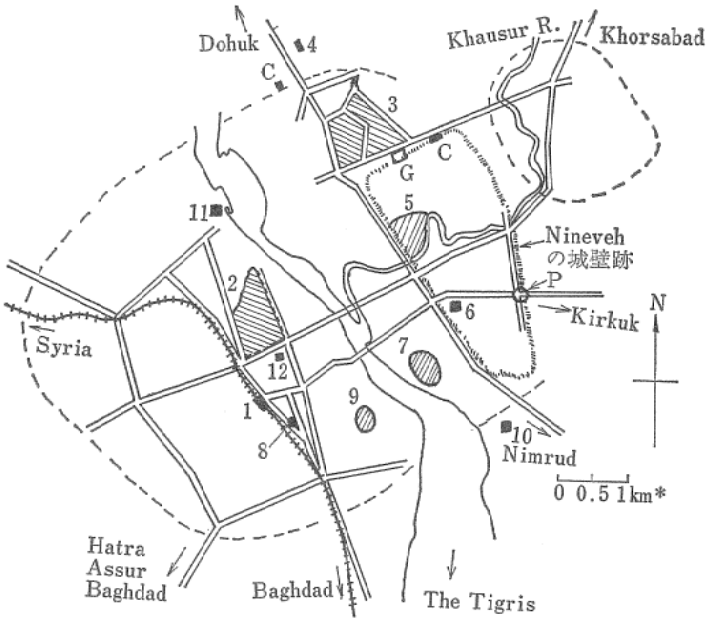
モスールと書かれている例が大部分であるがモースルの方が実際に近い．この都市はバグダードの北方400km，海抜220mの地点でティグリス河を挾み，約20万の人口を持っている．市の大部分はティグリスの右岸にあり，左岸にはあの名高いアッシリアの首都ニネヴェの遺跡が広がっている．周辺から北方にかけては豊かな平原が広がり，東から北にかけて遠い山々が望まれる．モースルはアッシリアの時代は小さな村落に過ぎなかったが徐々に発展しイスラム教徒の支配下に入った7世紀以降隆盛な都市となったのである．ここではキリスト教徒とイスラム教徒は平和的に共存していたらしく，古いキリスト教会や僧院がかなり残っている．気候に関しては古来〝一年に二度春のある都〟と呼ばれて来た位で，比較的温和な感じである．私が訪れた時は5月の初めで，正しく一度目の春酣の頃であった．二度目の春は暑い7，8月を過ぎて9月から初まりすぐ秋から冬へと移るのである．

市の概要を把握するには地図の助けを借りねばならないが，地方都市の地図を入手することは殆んど絶望的である．幸い，モースルでは関係者の尽力によりA5版位の大きさの一色刷りのツーリストガイドなる地図を帰るころ入手することが出来た．この地図は虫メガネが無ければ判らない程細かく道路が印刷されているが，旅行者にとって興味ある場所の多くは指示されて居らず，縮尺も無いという甚だ不思議な代物であった．図1に示したものは道路の大部分を省略し，多大の苦心を払って縮尺の見当をつけ場所の補足をしたものである．

最初に案内されたのは Rafidain ホテルという旅行者向きの3軒のホテルの一つであった．ここで一寸コメントを入れておきたいのはラファダインという名である．イラクの国立銀行の一つも Rafidain Bank であり，バスラで泊ったホテルも同じ名で至る所でお目にかかる名称であるが，これはメソポタミア，すなわち〝河の間に挾まれた地〟の意味である．

さて，この一見大きな民家風のホテルは部屋数が10位でまことに気楽な雰囲気を漂わせているが，部屋のドアの鍵は破損して居り，内部からは掛からなかった．且って，〝中近東のホテルは鍵のかからない部屋が多いので自前の鍵を

* 塙　輝雄（Teruo HANAWA），大阪大学工学部電子ビーム研究施設部，教授，理学博士，表面物性



1　モースル駅，Station Hotel
2　古いモースルの街並
3　モースル大学
4　文化センター（モースル大学）
5　Tel Quayenjo（遺跡）
　(Tel Kuyunjik)
6　Nabi Yunis Mosque
7　官　庁　街
8　Rafidain Hotel
9*　ス　ー　ク
10*　博　物　館
11*　古い城砦
12*　Al-Noori Mosque
C　Casrno,
G　復元された城門（ネルガル門）
◯　市街地
P　写真3を写した場所
註　*印は推定したもの

図1．MOSUR 略図

持って行くべきである″との記事を読んだことがあるが，ここで始めて合点が行ったのである．但し，この地は良く治安が保たれて居り，何一つ消えたものはなかった．

ホテルから 500 *m* 程歩けばモースル駅に着く．ステーションホテル（31室，旅行者向）が同居しているのでさぞ賑かであろうと思われるかも知れない．しかし正午ごろ行って見たら，強い日差しの下に人影一つなく，本当に駅やホテルの機能を果しているのであろうかと疑いたくなった程である．聞くと列車は早朝と深夜しか発着しないのである．駅の近くには広々とした空地があり，羊の一群が放牧されている位で，駅は市の中心ではない．貨車の引込線を歩いて行くと戦車や自走砲，野砲等を積んだ列車が何本も停っていた．ここを訪れた1975年の5月は，ここから数十粁離れた山岳地帯で数年に亘って続いたクルド戦争が終って2ケ月目であったのである．貨車の入換作業は鉄道ファンが随喜の涙を流しそうな，緑色の古い型の蒸気機関車で行われていた．8㎜を向けるとポイント掛りのオッサンは直立不動の姿勢をとり，運転手は威厳に満ちた表情を作ってポーズをとってくれたのであった．

市の中心附近にはモースルのシンボルであるアル・ヌーリ・モスクの〝傾いたミナレット〟がある．この塔は煉瓦作りで外面は隙間なく美事に彫られたアラベスクで飾られ，50*m*の高さがある．モスクは1172年ヌール・ウッ・ディンによって建てられたのであるが，塔が何時ごろから傾いたかは聞いても判らなかった．案内してくれたムハマ・ゼキ博士は子供のころ，この塔に昇ったことがあり，内部は2重ラセン階段になっていると誇らしげに説明した．すなわち昇りと降りの階段が分離しているので，ヨーロッパの塔のように昇降に混乱を来たすことはないのである．写真に見られるように塔はモスクの境内の方向に傾いて居るのでたとえ倒れても民家に被害は及ばないが，是非倒れないように保存したいとの事であった．勿論現在は塔内への立入りは禁止されている．なお，写真の道路の中央に溝が見られるがこれは下水溝である．イラクの各都市の裏路はすべてこのような型状をして居り両側の家々からの排水は路面を流れて中央に集まるわけである．塀の内側には庭園があり，始めてアラビア風庭園の趣向を見ることが出来た．勿論日本とは全く異なるし，ヨーロッパのように幾何学的でもない．糸杉，シュロ，等の背の高い木とが程良く配置され，生垣で囲まれた小道を歩めば両側に色とりどりの花壇が見られ，やがて石造りのしゃれた〝あずまや〟に至るといった具合で，庭園内に居る限り

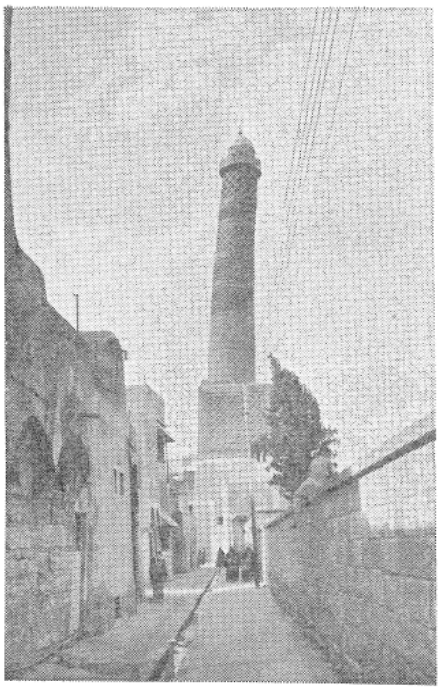


写真１．アル・ヌーリ・モスクの斜塔と裏通り

幾何学的な印象は受けない．一体，あの幾何学的なアラベスクと どんな 関係が ある のだろうか．再びミナレットに戻るが，モースルにある数多くのモスクのミナレットはすべて傾いているような気がしてならないのである．

モースルのスーク（市場）はバグダードのそれと異なり，遥かに古い趣きを残して居り，まことに興味深い場所であるが，中国製の安物のビニールカバンや日本製の生地などを見ると全く幻滅してしまう．しかし浅黒い顔にイレズミをし，真黒なアバイエ（チャドル）から太い(多分太く見えるように作られた）金の足輪，腕輪をのぞかせたベドゥインの婦人達，ターバンを巻き，ダブダブのズボンにキリリと帯を巻いたクルド人，色浅黒く，金髪でギリシャ型の鼻を備えた人などを見ると，アラブ人の世界とは一寸違う世界へ来たのだという満足感に満たされた．また，ある街角では堂々たる紳士が自動小銃をかついだ護衛を数人つれて歩いているのを見た．この辺境の国際都市も再開発が進みつつあり，小松ブルドーザーや日産小型トラックが目についた．モースル大学の物理学科のシャーカル博士愛用の車は日産チェリーであるといった具合で，改めて我が国の旺盛な輸出力を感じたのである．念のためチェリーの値段を聞くと車が70万円，税金が80万円（１ディナールを当時のレートで1000円と換算して）であった．ここに住むならば車は必需品であり，車は故障の無いことが望まれる．エンジニアが極度に不足しているので故障が少いことは絶対的な条件となっており日本車は高い評価を受けている．

モースルに来て見落してはならないのはモースル博物館とモースル大学附属の民俗学博物館である．前者は1952年に建てられ，イラク北部，特にニムルドとハトラで発掘された古美術品を数多く展示し，後者は約50年昔のモースルの人々の生活や民具等を人形や実物を用いて示して居り，いづれもまことに興味深い施設である．

市街地を抜けてティグリス右岸に達すると数mの段丘となってすぐ下を豊かな水が滔々と流れている．域砦の廃虚は特に高い河岸の段丘にあり，ここからはモースルの街や，緑濃い左岸の森，遠いなだらかな山々等の眺望を楽しむことが出来る．河岸へ来て最先に気が付いたことは，イラクのシンボルともなっている，ナツメ椰子の木が全く無いことであった．その代り糸杉がよく目立ち，濶葉樹の種類も多く，明らかに中,南部とは気候が異なることを示している．

河を渡って約１km進むとニネヴェの城壁に達する．ニネヴェはアッシリア帝国のセナケリブ王（ＢＣ704—681）によって首都と定められ，80年に亘って栄華を極めた後ＢＣ 612 年にメディア，新バビロニアによって亡ぼされ，徹底的に破壊されたのである．破壊は 凄まじく，200年を経ずしてその名すら忘れ去られてしまったと云われている．この都が再び姿を現わしたのは19世紀半ばで，最初フランス，後に英国の手によって発掘されたのである．発見された数多くの遺物は現在，ルーヴル，大英博物館に保管されているが，特に後者のコレクションは質量共に素晴らしく，アッシリア学を志す人士は現地を訪れるだけでは済まないのである．さて現地に転じよう．

総延長10kmを越すかつての強固な城壁は，今や自然に出来上った大きな丘の連らなりと見える．城壁の東側には水の溜った昔の壕や外壁の跡があり，住宅地から砂漠へとつながる．内側の北半分はなだらかな草地と畠になって居り，

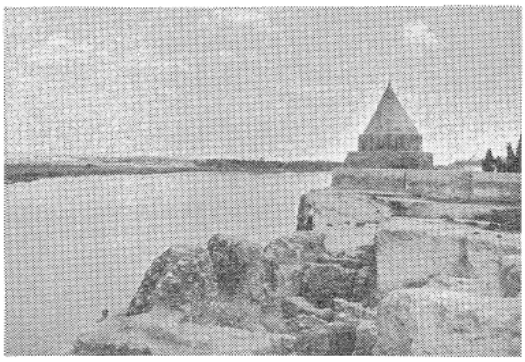


写真2．古い城砦からティグリス下流を望む，対岸はニネヴェの遺跡

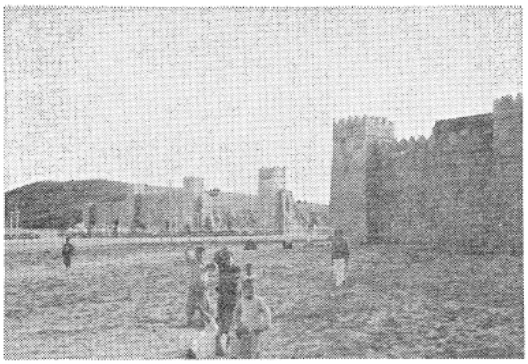


写真3．復元されたニネヴェの城壁

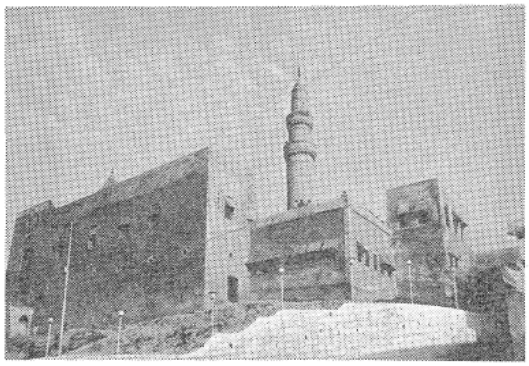


写真4．ナビ・ユニス・モスク

殆んど住宅はなく，目をさえぎるものはない．高い丘を選んで登って見ると，この古への城壁は目も遥かに連らなり，とても人手で築いたとは思えない程である．現在は写真に見られるように壁壁の一部は復元されて居り昔をしのぶことが出来る．城内で最も高い丘の上にはナビ・ユニス・モスクが聳え立ち，ホーサル河と城壁との間にある次に高い丘はテル・クァエンジョと呼ばれ，北側にアッシュールバニバル王の宮殿，南側にセナケリブ王の宮殿の跡がある．ナビは予言者ヨナのことで，この丘の上でヨナが人々を災厄から救ってくれた神に祈ったと伝えられ，またこの丘にはセナケリブ王の子，エサルハドンの宮殿が埋れているとされている．ナビ・ユニス・モスクを拝観に行くと，まずカメラを預けさせられ，靴も脱がなければならない．いくつかの部屋を通り過ぎて聖なる部屋に入る．床も壁面も美しい模様が織り出された色とりどりのカーペットで飾られ，天井は青いタイルのアラベスクである．部屋の中央には台状のものが布で覆われて恐らく，南北と思われる方向に置かれていた．他のイスラームの廟から類推すると，これは恐らくヨナの柩に当るものであろう．

テル・クァエンジョとは〝皆殺しの丘〟の意味であると教えられた．ニネヴェ陥落のとき宮殿の立並ぶこの丘に居た人は一人として助かった者は無かったのでこのように名付けられたのである．発掘跡は日乾し練瓦の壁とトタン屋根で保護されて居り，一見遺跡らしさは感じられなかった．ここを見物するには，すぐ傍に住んでいる政府の警備員の案内を乞わねばならない．彼は仲々の熱血漢で英国人達が如何に悪どい手を使って貴重な遺物や勝れた美術品を持ち去ったかを忿懣に満ちて語った．発掘跡に降りて行くと，大理石で作られたレリーフ，首の落ちた有翼の牛，多数の破片を見ることが出来る．削られた地層の断面を見ると，おびただしい炭や土器の破片が混じって居り，一寸ほじると錆びた鉄片や骨まで出て来た．確かに猛火に焼落ちた宮殿の跡らしい．警備員はうれしい事に，これらの破片の若干を集めて手渡してくれ，私は彼の写真を撮して後で送ったのである．

遺跡や墓に付きものの盗掘はあったのだろうか，果してこんな人目に付き易い場所で盗掘は可能であったのであろうか？　尋ねると，かなりやられているとの事である．その手口は，目星をつけた場所に家，といっても日乾し練瓦の簡単な代物である，を建て，住みながら床下を掘下げて行くというものである．勿論，現在は盗掘は不可能であることは云うまでもない．

北の城壁の中間には巨大なネルガル門（1956年に復元された）がそびえ，内部には発掘品が展示され，入口は人面有翼の牛像によって守ら

れている．門に続く東側の丘（城壁）の上にはカジノ(賭博場ではなく軽レストラン)があり，食事をしたり，お茶を飲みながら談笑する場所となっている．モースル大学はネルガル門の北側に隣接しているので数回このカジノを訪れたことがある．友人達とテラスに坐り，広大な遺跡を吹き渡る爽かな風に身を任せて，どこから見ても曲って見えるアル・ヌーリ・モスクのミナレット，夕陽に輝くナビ・ユニス・モスク，長い影を落とすテル・クァエンジョ，草を食む羊の群々，バラ色の遠い山々を見るともなしに見，近くの席に集う現地の人々のよく響く話声を聞くともなしに聞きながら，心を遊ばせた夕方の一刻が思い出される．

モースル大学のキャンパスを抜けて北方に向う道路をしばし進むと右手の丘の上に堂々とした三階建ての文化センターが建っている．これは大学附属の施設で，私は最初の日を除いてここのゲストルームに泊めてもらったのである．ここには広いダイニングルームに加えてバーまであり，かなりマシな料理が食べられる．部屋は広く快適で，驚いたことにナショナルのエアコンが備え付けられていた．窓からはティグリスの流れと河岸の森，モースルの街と遥かに続く砂漠等が見渡せる．休日にこの森に行って見ると，ピクニックの人々で埋まり，森の間の野原では若い人々がサッカーに興じていた.早朝，すぐ下の道には赤，ピンク，青，緑等の原色の服を着た婦人達が，ロバに乗ったり，歩いたりして畠仕事に出掛ける姿が見られる．

ある日，この道を北方の山岳までドライブに出掛けた．道の両側は緑の丘が大波のように目も遥かに続いていた．近くで見ると草丈30㎝位の草がまばらに生えていた．聞くと，何とこれは小麦であった．無肥料，無灌漑で栽培しているとの事で，あと数日雨が降らないと枯れる恐れがあると云っていた．65㎞走るとアルカという部落があり，この附近には遊牧民の黒いテントが各所に見られた．彼等はあらゆるトラブルと病気とを持ち込んで来るとの事で，歓迎されてはいない．アルカから右折すると山岳らしくなり，８㎞でこの地方の中心でクルド人の町ドホークに着く．ここまでは凸凹ははげしいがアスファルト舗装された道路であるが，ここから先は地道となる．ドホークはクルド人達でゴッタ返して居り，活気に満ちていた．さすがにここにはツーリスト向きのレストランは無く，小さなクルドレストランで昼食をとらざるを得なかった．ムハマ・ゼキ博士が注文してくれたのはパーチャであったが，米だけではなく大豆も多量に混ぜられていた．喉を通らないということは無いが半分食べるのがやっとであった．

ドホークから山に入るにつれて徐々に樹木が目に付き出し，澄んだ水の流れる谷川も現われてくる．真赤なケシの花や紫色の花で被われた丘，ベンガラ色の崖，奇怪な形の山，思いがけない松林，時々出くわす婦人達の華かな裾の長い衣裳，山の斜面にはり付いた土蜂の巣のような土の家，などに目を奪われている中に40㎞を走り，夏の保養地の一つ，スワラトゥーカに到着した．この附近は海抜1500ｍの高度であり，まことに爽快である．しかしホテルもカジノもすべての窓ガラスは破れ，内部には家具一つなく徹底的に荒れ果てていた.山の斜面に立並ぶ，バンガローも近づいて見れば同じことで，民家も屋根も焼落ちて土壁だけとなったものがかなり見られた．これらはすべて２ケ月前までは戦われていたクルド戦争の爪跡である．

これから更に進めば，道はなだらかな丘をうねりながら開けた峡谷に下って行きサルサング，アマディアといった集落に至るが，時間を考えて引返すことにした．この附近は緑にめぐまれている，といっても，牧草で被われた丘にまばらに大小の樹木が生えている程度で，秋吉台を連想させた．しかし，真夏に，焼けるような土色の世界から来れば，天国のように思えるに違いない．

（つづく）